

ゲルニカと パブロ・ピカソ 平和への祈り

監修＝久保田有寿

国立西洋美術館特定研究員



ピカソを知るためのキーワード …… 4

【闘牛、万能の芸術家、恋人・妻・モデル、祖国スペイン】

《闘牛士の死》《山羊》《貧しき食事》

第1章

《ゲルニカ》について くわしく知ろう

スペイン内戦はこうして起こった …… 8

《フランコの夢と嘘》

フランコとドイツ軍の思惑 …… 10

廃虚と化したゲルニカ …… 12

ピカソの怒り …… 14

《ゲルニカ》 …… 16-19

《ゲルニカ》を読みとく 1 …… 20

《ゲルニカ》を読みとく 2 …… 22

《ゲルニカ》のたどった数奇な運命 …… 24

《ゲルニカ》は日本でも鑑賞できる！ …… 27



第2章

ピカソの名画と歩んだ道

闘牛を愛したマラガ時代 …… 30

《エル・ビカドール》《初聖体拝領》《母の肖像》

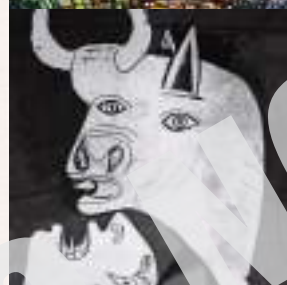
芸術家との交流の日々 …… 32

《科学と慈愛》《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》

友人の死と「青の時代」 …… 34

《青い部屋》《カサジェマスの肖像》《自画像》

《老いたギター弾き》《人生》



道化師と「バラ色の時代」 …… 38

《サルタンバンクの家族》《玉乗りの軽業師》

キュビスムの時代へ …… 40

《ガートルード・スタインの肖像》《アヴィニョンの娘たち》

《オルタの工場》《ヴォラールの肖像》《マ・ジョリ》

《藤椅子のある静物》《若い女の肖像》

古典的な作風へ …… 46

《ひじかけ椅子に座るオルガ》《アルルカン翠のパウロ》

そしてシュルレアリスムの時代へ …… 48

《夢》《ヨ人の踊り子》

《ゲルニカ》への予感 …… 50

《ミノタウロマキア》《ドラ・マールの肖像》《泣く女》

ピカソ平和への祈り …… 54

《納骨堂》《朝鮮の虐殺》《鳩》

南仏での新たな日々 …… 56

《牧神パンの頭部》《女ニ花》《生きる喜び》

巨匠たちとの対話 …… 57

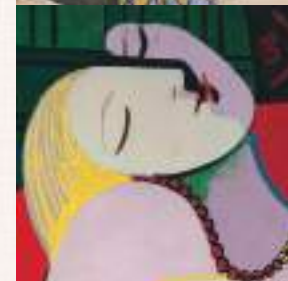
《アルジェの女たち》《草上の昼食》

《ラス・ナニーナス》

そして安らぎの日々へ …… 59

ピカソの歩み …… 60

さくいん …… 62



ピカソを知るための キーワード

闘牛

闘牛は、円形の闘牛場の中で闘牛士と牡牛が闘うスペイン発祥の競技です。動物愛護の観点から、今は昔ほど開催されませんが、かつてはスペインを中



【闘牛士の死】 [1933年・油彩・31×40cm・パリ、ピカソ美術館蔵 提供：ALBUM/ アフロ]

万能の芸術家

生涯に数多くの作品を残したピカソ。とりわけ画家としての活躍は目覚しく、時代ごとに作風を变幻自在に変えながら、油彩やそのデッサンなどを中心に多くの作品を世に送り出しました。

そればかりではなく、ピカソは彫刻や版画、陶器や本の挿し絵、さらには舞台芸術なども手がけ、悩んで筆が進まないときは、詩作にも励みました。まさにあらゆる表現をこなした「万能の芸術家」でした。制作した作品は15万点にのぼるといわれています。

少年時代から持ち続けていたピカソの創造へのエネルギーは、年老いても衰えることがありませんでした。

スペインの首都マドリードの闘牛のようす。写真：石原正雄 / アフロ



心とした南ヨーロッパや、中南米などでさかんに行われていました。闘牛士たちは馬に騎乗して牡牛と闘い、終盤には赤い布を持ったマタドール（エリート闘牛士）が牡牛と一対一で闘います。牡牛の背中に剣を突き刺して、牡牛が息絶えるか、戦意がなくなるまで続けられます。

父親に連れられ、マラガにできた闘牛場を何度も訪れた幼いピカソは、マタドールの勇姿とともに、絶命する牡牛や、お腹を引き裂かれた馬など、その壮絶な生と死のドラマを目に焼きつけたことでしょう。ピカソは生涯を通して闘牛をこよなく愛し、《ゲルニカ》をはじめ、多くの絵に牡牛と馬を描くことになります。



山羊

【1950年・彫刻・パリ、ピカソ美術館蔵 提供：akg-images/ アフロ】

藤かごやヤシの葉など、ピカソが拾い集めた雑多なものが組み合わされた、遊び心ある晩年の彫刻の代表作。

貧しき食事

【1904年、エッチング、高崎市美術館蔵】

パンとワインだけの質素な食事の風景。社会の底辺を生きる弱者たちにまなざしを向けたピカソ初期の銅版画の大作。



恋人・妻・モデル

ピカソの人生には、数多くの女性が登場します。そして、その多くがモデルを務めただけでなく、戦争のような同時代の社会の変化とともに、ピカソの制作活動や画風に大きな影響を及ぼしました。

パリの極貧時代に出会ったフェルナンド・オリヴィエとの生活は、青一色だったピカソの絵に彩りを与え、「バラ色の時代」につながりました。

「キュビズム」の時代の恋人エヴァ・グエルの死の悲しみを乗り越えた先で出会ったのがオルガ・コクローヴァ。ピカソの最初の妻です。優美なオルガを写実的に描き、古典的な作風へと転換していきます。

「シュルレアリスム」の時代に新たなミューズとして登場したのがマリー＝テレーズ・ワルテル。ピカソに鮮烈なインスピレーションを与えました。

恋人、そして芸術の理解者でもあったのはドラ・マールでした。ピカソの《ゲルニカ》制作を支え、その創造の軌跡の目撃者となりました。

戦後にはフランソワーズ・ジローとの平穏な日々を過ごし、ジャクリーヌ・ロックは晩年のピカソの精神的な支えとなりました。

ピカソは、自分の作品や生き方について語ることはほとんどありませんでした。ピカソの生きざまを後世に伝えたのは、こうした女性たちでした。



最初の妻オルガ・コクローヴァと38歳のころのピカソ。写真：akg-images/ アフロ



戦後の平和の日々を共に過ごしたフランソワーズ・ジローと。写真：Ullstein bild/ アフロ

祖国スペイン

画業や人生の多くのときをパリで過ごしたピカソでしたが、フランスに帰化することはありませんでした。幼少期を過ごしたマラガやア・コルーニャ、青春を過ごしたバルセロナ、巨匠たちの模写に明け暮れたマドリード……。ピカソにとってスペインこそ終生の祖国でした。

そして、北部ゲルニカが無差別に爆撃を受けたことは、祖国を愛するピカソにとって大きな衝撃でした。だからこそ報道でゲルニカの悲劇を知ると、依頼されていたパリ万博の壁画をすぐに戦争をテーマにしたものに変え、大作《ゲルニカ》が誕生することになりました。その《ゲルニカ》を自由が奪われたスペインに返すことを許さなかったのも、祖国を愛するがゆえのことでした。





現在《ゲルニカ》が展示されているスペインの首都マドリードのソフィア王妃芸術センター。

これが《ゲルニカ》なのね。
すごい迫力！

ピカソはこの絵で
何をいちばん
訴えたかったのかな？

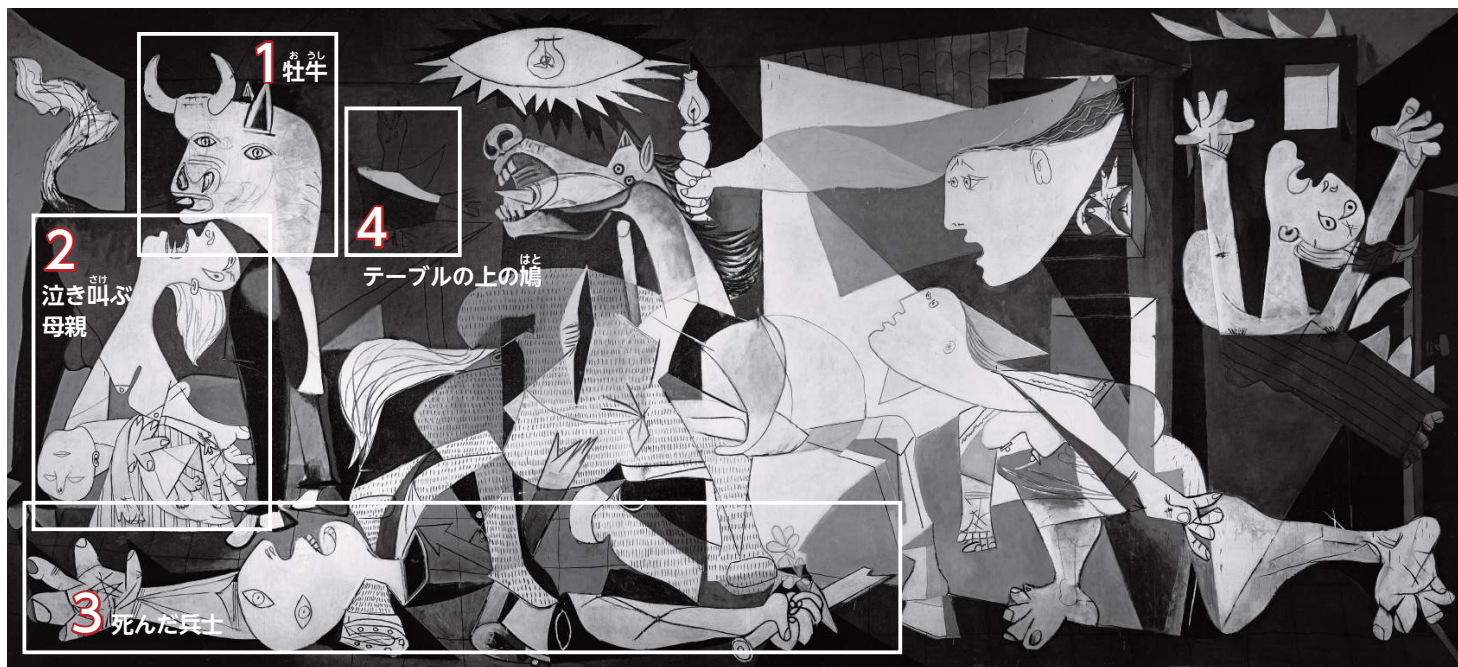


ゲルニカ

【油彩・349.3×776.6cm・マドリード、ソ
フィア王妃芸術センター蔵 提供：Bridgeman
Images/ アフロ】

1937年
56歳

《ゲルニカ》を読みとく 1



《ゲルニカ》をめぐるさまざまな解釈

1937年6月初め、《ゲルニカ》が完成します。バスク地方の小都市ゲルニカに対する卑劣な無差別攻撃に対し、ピカソはそれまで最も衝撃的な絵、自分のとりうる最大限の武器でこたえたのです。

しかし完成以来、現在にいたるまで《ゲルニカ》ほどいろいろな解釈を生んできた絵画はほかにあったでしょうか。ピカソが生涯を通じて心を注いだきた牡牛の表情にさえ多くの謎があり、その解釈が正反対のこ

ともあります。今でも鑑賞する人の数だけ解釈があるのです。

ここでは研究者たちのさまざまな解釈を一部紹介しますが、確かなことは、ピカソは戦争の場面そのものではなく、爆撃の犠牲となった人々の叫びや悲しみ、祖国が引き裂かれてしまった悲劇、祖国を戦場に変えてしまったフランコに対する憎悪を普遍的な方法で描いたことではないでしょうか。



1 牡牛

最も解釈が分かれるところです。牡牛は闘牛のイメージから強さの象徴と言われていますが、この牡牛は、目の前の惨劇の目撃者としてそこにたたずんでいるようです。また見方によっては、我が子を抱いて泣き叫ぶ母親を守っているようにも、また鑑賞者であるわたしたちの方を見て何かを訴えかけているようにも見えます。牡牛はピカソ自身ではないかとする研究もあります。

2

泣き叫ぶ母親

爆撃を受けたゲルニカの無防備な市民の犠牲を表すものとされています。死んだ我が子を抱いて嘆き悲しむ母親。その目も鼻も、涙や勾玉の形をしています。

この図はミケランジェロの『ピエタ』（十字架から下ろされたキリストを抱くマリア像）を思い起こすという研究者もいます。磔刑（はりつけの刑）のキリストは、しばしばピカソの絵画のテーマのひとつになっています。



《ピエタ》ミケランジェロ作・ヴァチカン、サン・ピエトロ寺院蔵



3

死んだ兵士

フランコ軍によって犠牲になった共和国軍兵士を描いたものとされています。折れた刀の先にアネモネの花が咲いています。アネモネは「復活」を意味する花とされることから、ゲルニカ市民が強いられた破滅から再生することへの願いや希望がこめられているともいわれます。

4

テーブルの上の鳩

ピカソは戦後に平和の象徴として鳩を多く描いていますが、この鳩は天に向かって叫んでいます。そして室内を表すテーブルの上に描かれています。

